

「形容詞語幹十サ」の詠嘆の意味

——人のともしさ・妹がかなしさ・見るがともしさ

田中 みどり

はじめに 種々相

一・一 詠嘆表現
一・二 述語に形容詞をとって詠嘆表現になるものの
種々相

一・三 述語に形容詞をとって詠嘆表現になるものの
特徴

二 分析

二・一 「見らくし良しも」と「見るがさやけさか」

二・二 「見れば悲しき」と「見るがさやけさ」

二・三 枕草子の「暑さ」・源氏物語の「うれしさ」
「御かなしさ」

三 考察

三・一 山田孝雄の喚体句

三・二 主語と対象

三・三 「音の清けく」と「磯のさやけさ」

結び

「形容詞語幹十サ」は特別な語法ではなく、「名詞」であり、「ノ・ガ十ノ・ガ十名詞（形容詞語幹十サ）」の詠嘆は、「ノ」は「ノ」であることよ」と訳すのではなく、「ノ」の「さよ」と訳すものである。それは、自身の感情を吐露するものでもあり同時に、「ノ」「ガ」がうける名詞・名詞句「ノ」の属性でもある。自身の感情を吐露する場合「ノ」「ガ」の上は対象となり、属性の場合「ノ」「ガ」の上は主語となる。それは、自身の感情を吐露するものでもあるため、ク語法で詠嘆をあらわすものが、「ノ」であることよ」と訳すことができ、冷静であるのに対し、情動的ということが出来る。

本稿では、岩波新日本古典文学大系『萬葉集』（一九九九年～二〇〇三年）、小学館新編日本古典全集『枕草子』（一九九七年）、岩波新日本古典文学大系『源氏物語』（一九九三年～一九九七年）を底本とする。ただし、萬葉集の訓については、適宜、勘案する。以下、岩波新日本古典文学大系を「新大系」と略す。なお、小学館新編日本古典文学全集を「全集」、新潮日本古典集成を「集成」と略す。日本国語大辞典第二版（二〇〇〇年～二〇〇二年）を「日本国語大辞典」とする。

○印は歌および物語本文、◎印は訳（筆者が勘案したもの。新大系・全集・集成のものは、その都度明記）、◇印は引用、※印は筆者の考えをあらわす。

はじめに

萬葉集に「ノ・ガ」形容詞語幹＋サで詠嘆をあらわす表現がある。この形の中でノ、ガは、

○今のごと 恋しく君が 思ほえば いかにかもせむ するす

べのなさ（須流須辺乃奈左） [萬葉十七・3928]

○松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともし
さ（比等能等母斯佐） [萬葉五・863]

のように「ノ」の部分の名詞である場合には「ノ」を取り、名詞のうちでも「妹」など近い人の場合には

○塵泥の 数にもあらぬ われゆゑに 思ひわぶらむ 妹がか
なしさ（伊母我可奈思佐） [萬葉十五・3727]

のように「ガ」取る。このノとガの使い分けは、連体修飾をする際のノ・ガの使い分けと同じである。さらに、「ノ」の部分の名詞句である場合には

○防人に 行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしさ（美流
我登毛之佐） 物思ひもせず [萬葉二十・4425]

のように「ガ」を取る。これは、

○震立つ 春の初めを 今日のごと（家布能其等） 見むと思
へば 樂しと思ふ [萬葉二十・4300]

○天地の 底ひの裏に あがごとく（安我其等久） 君に恋ふ
らむ 人はさねあらじ [萬葉十五・3750]

○いとのかて 痛み傷には 辛塩を 注くちふがごとく（灌
知布何其等久） [萬葉五・897]

のように、「ゴト（シ）」につづく場合と同じである。⁽¹⁾

このような「ノ・ガ」形容詞語幹＋サは、古く、山田孝雄が「喚体句」のひとつとしてあげたものである。⁽²⁾ 新大系では、巻二十・4425歌

○防人に行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしさ 物思
ひもせず

の脚注に、

◇「見るがともしさ」は、動詞の連体形を「ガ」で受けて、形容詞の名詞形で結ぶ感動表現の一類型。見ることの羨ましきよ、の意。

のように、「形容詞語幹＋サ」を「形容詞の名詞形」と言ってい

る。一方、日本国語大辞典第二版〈へが〉の項・格助詞①に、

◇「形容詞＋さ」の形に続き、感動を表わす。「さ」は体言を作る接尾語であるから、この用法は、形式的には①の連体格用法といえるが、意味的には「…が…であることよ」と下の形容詞に叙述性が認められるので、③①の主格用法と同じである。①の用法から③の用法への過渡的用法と見られる。↓
語誌⁽³⁾

(※なお、ここに言う①は「連体格用法」、③は「連用格用法」である。)

と言ひ、【語誌】(3)に、

◇③の用法を山田文法では「喚体句」と称する。⁽⁴⁾

と言う。また、日本国語大辞典第二版〈へが〉の項・格助詞③に、

◇体言を受け、形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものを修飾する。↓語誌⁽⁵⁾(7)

と言ひ、【語誌】(7)に、

◇形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものは体言の資格を有するから、①③の用法は形態的には①①④の用法と同じであるが、意味的には詠嘆表現ながら主述関係が認められ、④①の用法に近い。「山田文法」では喚体句と称する。⁽⁶⁾

(※なお、

ここに言う①は「連体格を示す格助詞。体言または体言に準ずるものを受けて下の体言にかかる。」

①①は「下の実質名詞を種々の関係(所有・所属・同格・属性その他)において限定・修飾する。」

①①④は「修飾される実質名詞が表現されているもの。」

④は「主格を示す助詞。」

④①は「④従属句や条件句など、言い切りにならない句の主語を示す。」

④連体形で終わる詠嘆の文や疑問・反語・推量文中の主語を示す。」

④言い切りの文の主語を示す。」

である。)

と言う。(※以下、『日本国語大辞典』(第二版)を「日本国語大辞典」と記す。)

日本国語大辞典〈へが〉の項の「主格用法と同じである」というのは、何か。4425歌の新大系の訳は、

◎防人として行くのは誰の旦那さんですか、と尋ねる人を見る
と羨ましい。物思いもせずに。

となつており、「見るがともしさ」は、「見ると羨ましい」になつていて、主述関係が訳にあらわれてはいない。そこで、右の863歌の訳を見る。

○松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともし
さ(比等能等母斯佐) [萬葉五・863]

を、新大系では、

◎松浦川の玉島の浦に若鮎を釣っている娘らを見ているであろ

う人の羨ましきよ。

「娘らを見ているであらう人の羨ましきよ」と訳している。さらに、巻十五・3734歌

○遠き山 関も越え来ぬ 今更に 逢ふべきよしの なきがき

ぶしき (奈伎我佐夫之佐)

[萬十五・3734]

については、

◎遠い山や関も越えて来た。今はもう逢うべき手だてのないのが寂しいことよ。

と訳している。3734歌の訳の中の「もう逢うべき手だてのないのが寂しいことよ」が日本国語大辞典に言う「…が…であることよ」にあたる。このように、新大系では、歌によっていろいろな訳をあてているわけであるが、日本国語大辞典の説明のように、「下の形容詞に叙述性が認められる」ことが「ノ」「ガ」が主格用法になるということになるのであるか。「形容詞語幹+サ」という語法の主述関係とはどのようなものであるか。

以下に、「形容詞語幹+サ」という語法の主述関係とはどのようなものであるかということ、また、その用いられている歌の訳について考えたい。

一 種々相

一・一 詠嘆表現

萬葉時代の人は、今日の前の景色を讃嘆し、自分の思いを率直に歌った。

○…もしきの 大宮人の まかり出て 漕ぎける船は 棹梶も なくてさぶしも (無而佐夫之毛) 漕がむと思へど

[萬葉三・260]

の「なくてさぶしも」は、「棹も梶もなくて寂しいことだよ」と詠嘆している。

○風早の 美保の浦廻の 白つつじ 見れどもさぶし (見十方不恰) なき人思へば 或いは云ふ、「見れば悲しも (見者悲霜)

なき人思ふに」

[萬葉三・434]

の「見れどもさぶし」は、別伝では「見れば悲しも」になっている。別伝の「見れば悲しも」のほうは「モ」という終助詞が詠嘆をあらわすが、「見れどもさぶし」のほうは「さぶし」という終止形で止めている。ではあるが、そこに詠嘆の余韻が漂う。詠嘆表現には、事実を述べるにとどめ、そこに余韻で詠嘆をあらわす場合もあれば、歌末にモやカ、カモなどの終助詞がついて詠嘆をあらわすものもある。

○泊瀬川 流るるみをの 瀬を速み ゐで越す波の 音の清けく (音之清久)

[萬葉七・1108]

のように歌末がク語法で、「〜であることよ」という詠嘆の意味になるもの、

○潮満てば 入りぬる磯の 草なれや 見らく少なく 恋ふらくの多き（見良久少 恋良久乃太寸）〔萬葉七・1394〕

◇草なれや―疑問条件でも断定の助動詞ナリを用いたナレヤは反語性が表面化して、〜ではないのに、まるで〜のように、のような意味に用いられることがある。

（全集頭注）

◇『歌経標式』に第三句以下が「草ならし見る日少なく 恋ふる夜多み」という形で収められており、塩焼王の恋歌ということになっている。（全集頭注）

のように歌末が連体形で、「〜であることよ」という詠嘆の意味になるものもある。

○天地と 相榮えむと 大宮を 仕へ奉れば 貴く嬉しき（都可倍麻都礼婆 貴久字礼之伎）〔萬葉十九・4273〕

も連体形の中に「〜であることよ」という詠嘆をこめるものであるが、同じく官人の仕え奉ることをうたった歌に、

○…もののふの 八十伴の男の…ゑらゑらに 仕へ奉るを 見るが貴さ（仕奉乎 見之貴者）〔萬葉十九・4266〕

がある。ここでは「名詞句＋が＋貴さ」で「見ることの貴さよ」と詠嘆している。また、

○…やすみしし わが大君 秋の花 しが色々に 見したまひ 明らめたまひ 酒みづき 栄ゆる今日の あやに貴さ（栄流

今日之 安夜尔貴左）

〔萬葉十九・4254〕

○秋の花 種々にあれど 色ごとに 見し明らむる 今日之貴さ（見之明良牟流 今日之貴左）〔萬葉十九・4255〕

のように、「名詞＋ノ＋貴さ」の形のものもある。

〈はじめに〉に挙げた

○今のごと 恋しく君が 思ほえば いかにかもせむ するすべのなさ（須流須辺乃奈左）〔萬葉十七・3928〕

の「するすべのなさ」は、

○草枕 旅去にし君が 帰り来む 月日を知らむ するすべの知らなく（須辺能思良難久）〔萬葉十七・3937〕

の「すべの知らなく」と似ている。「すべの知らなく」はまた、

○大伴の 遠つ神祖の 奥つ城は 著く標立て 人の知るべく（比等能之流倍久）〔萬葉十八・4096〕

の「人の知るべく」と形が似ているように見えるが、4096歌は「（はつきりと標を立てなさい。）人が知るように。」であり、「すべの知らなく」は「（あなたが帰ってくる日を）知る方法がわからないことだ」という詠嘆の意味になる。その違いは、この

場合、歌全体のことば続きや内容から読み取ることとなる。

このように、形容詞で言いおさめて詠嘆になるものには、さまざまなヴァリエーションがある。以下に、そのヴァリ

エー・ションを挙げて、「ゝ十ノ・ガ十形容詞語幹十サ」の形の詠嘆表現を考える一助とする。

一・二 述語に形容詞をとって詠嘆表現になるものの種々相

まず、へ一・一に述べた歌末表現をまとめる。

A 終止形で終止するもの

- (1) ますらをの さつ矢たばさみ 立ち向かひ 射る形的は見
るにさやけし(射流田方波 見尔清潔之)〔萬葉一・61〕

B 終助詞カを伴うもの

- (2) 新しい 年の初めに 思ふどち い群れて居れば 嬉しくも
あるか(伊牟礼氏乎礼婆 宇礼之久母安流可)〔萬葉十九・4284〕

C 終助詞モを伴うもの

- (3) …もししきの 大宮人の まかり出て 漕ぎける船は 棹梶
もなくさぶしも(無而佐夫之毛) 漕がむと思へど〔萬葉三・260〕

D 終助詞カモを伴うもの

- (4) わが背子が 国へましなば ほととぎす 鳴かむ五月は さ
ぶしけむかも(奈可牟佐都奇波 佐夫之家牟可母)〔萬葉十七・3996〕

E 歌末が連体形で、「〜であることよ」の意になるもの

- (5) 天地と 相榮えむと 大宮を 仕へ奉れば 貴く嬉しき(都
可倍麻都礼婆 貴久宇礼之伎)〔萬葉十九・4273〕

F 形容詞ク語法でおさめ、「〜であることよ」の意になるもの

- (6) 泊瀬川 流るるみをの 瀬を速み るで越す波の 音の清け
く(音之清久)〔萬葉七・1108〕

G 形容詞連用形

- (7) 見まく欲り 来しくも著く 吉野川 音のさやけさ 見るに
ともしく(音清左 見二友敷)〔萬葉九・1724〕

H 形容詞語幹十サ

- (8) 松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともし
さ(比等能等母斯佐)〔萬葉五・863〕

- (9) 塵泥の 数にもあらぬ われゆゑに 思ひわぶらむ 妹がか
なしさ(伊母我可奈思佐)〔萬葉十五・3727〕

- (10) 防人に行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしさ(美流
我登毛之佐) 物思ひもせず〔萬葉二十・4425〕

以上が、歌末表現でみた形容詞の詠嘆表現である。

次に、述語に形容詞をとって詠嘆になる表現のうち、
へ述語となる形容詞の主語あるいは対象を指し示す助詞、
によつて分類する。

a 助詞のないもの

名詞句＋形容詞終止形

- ① 衣手に 水漬つくまで 植ゑし田を 引板わが延へ 守れる
 苦し (真守有栗子) [萬葉八・1634]
 名詞＋形容詞終止形＋終助詞モ

- ② あさもよし 紀人ともしも (木人乏母) 真土山 行き来と
 見らむ 紀人ともしも (樹人友師母) [萬葉一・55]
 ク語法＋形容詞終止形＋終助詞モ

- ③ あかねさす 日は照らせれど ぬばたまの 夜渡る月の 隠
 らく惜しも (夜渡月之 隠良久惜毛) [萬葉二・169]
 ④ 難波潟 潮干なありそね 沈みにし 妹が姿を 見まく苦し
 も (妹之光儀乎 見卷苦流思母) [萬葉二・229]

- ⑤ 奥山に 住むといふ鹿の 夕さらず 妻問ふ萩の 散らまく
 惜しも (散久惜裳) [萬葉十・2098]

b ハ

名詞＋ハ＋形容詞終止形

- ⑥ ますらをの さつ矢たばさみ 立ち向かひ 射る形的形は 見
 るにさやけし (射流円方波 見尔清潔之) [萬葉一・61]
 「君」＋ハ＋形容詞終止形＋終助詞モ

- ⑦ 山吹の 繁み飛び潜く うぐひすの 声を聞くらむ 君はと
 もしも (伎美波登母之毛) [萬葉十七・3971]
 名詞＋ハ＋形容詞終止形＋終助詞モ

- ⑧ 秋立ちて 幾日もあらねば この寝ぬる 朝明の風は 手本
 寒しも (朝開之風者 手本寒母) [萬葉七・1555]

名詞句＋ハ＋形容詞終止形＋終助詞モ

- ⑨ 神さぶと 否にはあらず 秋草の 結びし紐を 解くは悲し
 も (解者悲哀) [萬葉八・1612]

名詞＋ハ＋形容詞連体形 (連用形＋アリ)＋終助詞カ

- ⑩ 荒雄らが 行きにし日より 志賀の 海人の 大浦田沼は さ
 ぶしくもあるか (大浦田沼者 不棄有哉) [萬葉十六・3863]

名詞＋ハ＋形容詞連体形＋助詞ロ＋終助詞カモ

- ⑪ 藤原の 大宮仕へ 生れつくや 娘子がともは ともしきろ
 かも (処女之友者 乏吉呂賀聞) [萬葉一・53]

名詞＋ハ＋形容詞未然形＋助動詞ム＋終助詞カモ

- ⑫ わが背子が 国へましなば ほととぎす 鳴かむ五月は さ
 ぶしけむかも (奈可牟佐都奇波 佐夫之家牟可母) [萬葉十七・3996]

※述語形容詞の主語あるいは対象を指し示す語にハがお
 かれた場合、形容詞は終助詞モおよびカ、カモなどで
 詠嘆をあらわすことが多い。

c モ

名詞＋係助詞モ＋形容詞終止形 (＋終助詞モ)

- ⑬ あが恋は まさかもかなし (麻左香毛可奈思) 草枕 多胡

の入野の 奥もかなしも (於父母可奈思母)

〔萬葉十四・3403〕

d
ヲ

「兄」十格助詞ヲ十形容詞終止形十終助詞モ

⑭ 難波瀉 潮干のなごり 飽くまでに 人の見む兒を われし

ともしも (人之見兒乎 吾四乏毛) 〔萬葉四・533〕

e
シ

名詞十間投助詞シ十形容詞終止形十終助詞モ

⑮ 朝には 海辺にあさりし 夕されば 大和へ越ゆる 雁しと

もしも (鴈四乏母) 〔萬葉六・954〕

⑯ 浦潭に 伏したる君を 今日今日と 来むと待つらむ 妻し

悲しも (妻之可奈思母) 〔萬葉十三・3342〕

ク語法十間投助詞シ十形容詞終止形十終助詞モ

⑰ 紐解かぬ 旅にしあれば あのみして 清き川原を 見ら

くし惜しも (見良久之惜蒙) 〔萬葉六・913〕

⑱ 梅の花 散らすあらしの 音のみに 聞きし吾妹を 見らく

し良しも (見良久四吉蒙) 〔萬葉八・1660〕

⑲ さ雄鹿の 心相思ふ 秋萩の しぐれの降るに 散らくし惜

しも (落僧惜毛) 〔萬葉十・2094〕

※間投助詞シが用いられる場合、後の形容詞は終助詞モを伴うことが多い。

f
ノ

名詞十格助詞ノ十形容詞ク語法

⑳ 泊瀬川 流るるみをの 瀬を速み ゐで越す波の 音の清け

く (音之清久) 〔萬葉七・1108〕

※歌の末尾をク語法でおさめた場合は、「くであることよ」という詠嘆をあらわす。

名詞十格助詞ノ十形容詞連体形十終助詞カ

㉑ 渚には あぢ群騒き 島廻には 木末花咲き ここばくも

見のさやけきか (見乃佐夜気吉加) :

〔萬葉十七・3991〕

名詞十格助詞ノ十形容詞語幹十サ

㉒ 今のごと 恋しく君が 思ほえば いかにかもせむ するす

べのなさ (須流須辺乃奈左) 〔萬葉十七・3928〕

㉓ 松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともし

さ (比等能等母斯佐) 〔萬葉五・863〕

㉔ 大さ海の 水底とよみ 立つ波の 寄せむと思へる 磯のさ

やけさ (将依思有 磯之清左) 〔萬葉七・1201〕

㉕ ぬばたまの 夜霧の立ちて おほほしく 照れる月夜の 見

れば悲しさ (見者悲沙) 〔萬葉六・982〕

※982歌は「照れる月夜の悲しさ」の間に、「見れば」が挿入されたものである。表面は「照っている月の光が悲しい」といい、同時に「照っている月を見てみると、悲しい気持ちになってくる」といっている。こ

れはあとの②⑥と関連する。

「妹」＋格助詞ガ＋形容詞語幹＋サ

②⑥ 塵泥の 数にもあらぬ われゆゑに 思ひわぶらむ 妹がかなし

なしさ (伊母我可奈思佐) [萬葉十五・3727]

「兄」＋格助詞ガ＋形容詞語幹＋サ

②⑦ あしひきの 山沢人の 人さには まなと言ふ兄が あやに

かなしさ (麻奈登伊布兄我 安夜尔可奈思佐)

[萬葉十四・3462]

「をとめ(ら)」＋格助詞ガ＋形容詞語幹＋サ

②⑧ 千沼壮士 菟原壮士の …争ひに 妻問ひしける をとめら

が 聞けば悲しき (聞者悲左) … [萬葉十九・4211]

※4211歌は、②⑤の「見れば」と同様、「聞けば」を

挿入。「おとめの哀しさよ」といい、「おとめの言い伝

えを聞くと悲しい気持ちになる」といつている。

※②⑥の「妹」、②⑦の「兄」と同じように、「をとめら」を

親愛なる相手として、「ガ」を使用した。

名詞句＋格助詞ガ＋形容詞語幹＋サ

②⑨ 遠き山 関も越え来ぬ 今更に 逢ふべきよしの なきがさ

ぶしき (奈伎我佐夫之佐) [萬葉十五・3734]

③⑩ 疊薦 牟良自が磯の 離磯の 母を離れて 行くが悲しき

(波々乎波奈例弓 由久我加奈之佐)

③⑪ 防人に 行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしき 物思

ひもせず (美流我登毛之佐) [萬葉二十・4425]

※②⑨③⑪は、名詞句をうけて「ガ」＋形容詞語幹＋サの形である。

以上が、述語に形容詞をとるもののうち、述語となる形容詞の主語あるいは対象を指し示す助詞によつて分類したものである。

次に、形容詞で述べられる状態や感情をおこすこととなつたきつかけとなつた「見れば」「聞けば」などの行動を記したものを挙げる。

h 「見れば」「聞けば」

ば―終止形

③⑫ …神さびて 見れば貴く 宜しなへ 見ればさやけし (見者

清之) この山の… [萬葉六・1005]

③⑬ 朝床に 聞けば遙けし (聞者遙之) 射水川 朝漕ぎしつ

つ 唱ふ船人 [萬葉十九・4150]

ば―連体形

③⑭ 古の 人にわれあれや 楽浪の 古き京を 見れば悲しき

(見者悲寸) [萬葉一・32]

ばーも

③5 あしひきの 八つ峰の雉 鳴きとよむ 朝明の霞 見れば悲

しも(見者可奈之母)

〔萬葉十八・4149〕

③6 朝日照る 島の御門に おほほしく 人音もせねば まうら

悲しも(真浦悲毛)

〔萬葉二・189〕

ばーか

③7 能登川の 後には逢はむ しましくも 別るといへば 悲し

くもあるか(別等伊倍婆 可奈之久母在香)

〔萬葉十九・4279〕

③8 新しい 年の初めに 思ふどち い群れて居れば 嬉しくも

あるか(伊牟礼氏乎礼婆 宇礼之久母安流可)

〔萬葉十九・4284〕

ばーかも

③9 …五月蠅なす 騒ぐ舍人は 白たへに 衣取り着て 常なり

し 笑まひ振舞 いや日異に 変はらふ見れば 悲しきろか

も(更経見者 悲呂可聞)

〔萬葉三・478〕

今一つ、「見るに」の形のものもある。

i 「見るに」

にー連用形

④0 見まく欲り 来しくも著く 吉野川 音のさやけさ 見るに

ともしく(音清左 見二友敷)

〔萬九・1724〕

以上A～Hおよびa～iが、萬葉集で、述語に形容詞をと

って詠嘆表現になるものの形である。なお、最後の

④0 見まく欲り 来しくも著く 吉野川 音のさやけさ 見るに

ともしく(音清左 見二友敷)

〔萬葉九・1724〕

は、「音のさやけさ」と「見るにともしく」とが並立して述語となっている例である。「音のさやけさよ。見ればますます見たい気持ちがつつつて。」と現代語訳することができる。

一・三 述語に形容詞をとって詠嘆表現になるものの特徴

ここに掲げた詠嘆表現から、特徴的なものをあげる。

1、詠嘆表現には、事実を述べるにとどめ、そこに余韻で詠嘆をあらわす場合もある。

2、歌末が連体形で、「～であることよ」という詠嘆の意味になるものもある。

3、b、述語形容詞の主語あるいは対象を指し示す語にハがおかれた場合、形容詞は終助詞モおよびカ、カモなどで詠嘆をあらわすことが多い。

4、aの「ク語法+形容詞終止形+終助詞モ」

③あかねさす 日は照らせれど ぬばたまの 夜渡る月の

隠らく惜しも(隠良久惜毛)

〔萬葉二・169〕

④難波潟 潮干なありそね 沈みにし 妹が姿を 見まく

苦しも (見卷苦流思母) [萬葉二・229]

⑤奥山に 住むといふ鹿の 夕さらず 妻問ふ萩の 散ら

まく惜しも (散久惜裳) [萬葉十・2098]

とeの「ク語法+間投助詞シ+形容詞終止形+終助詞モ」

⑬：紐解かぬ 旅にしあれば あのみして 清き川原を

見らくし惜しも (見良久之惜蒙) [萬葉六・913]

⑭梅の花 散らすあらしの 音のみに 聞きし吾妹を 見

らくし良しも (見良久四吉裳) [萬葉八・1660]

⑮さ雄鹿の 心相思ふ 秋萩の しぐれの降るに 散らく

し惜しも (落僧惜毛) [萬葉十・2094]

とを較べてみると、eのほうには間投助詞シが用いられている。シは語調を整えるために挿入されたものと考えられているのであるが、このような間投助詞シが用いられる場合には後の形容詞は終助詞モを伴うことが多い。

5、g ガ

⑯あしひきの 山沢人の 人さには まなと言ふ児が あ

やにかなしき (麻奈登伊布兒我 安夜尔可奈思佐)

[萬葉十四・3462]

と

○新田山 嶺には付かなな わに寄そり はしなる見らし
あやにかなしも (波之奈流兒良師 安夜尔可奈思母)

[萬葉十四・3407]
とを較べてみると、3407歌では、「シーシモ」の形をとっている。

6、f 「名詞+格助詞ノ+形容詞ク語法」

⑳泊瀬川 流るるみをの 瀬を速み めで越す波の 音の

清けく (音之清久) [萬葉七・1108]

歌の末尾をク語法でおさめた場合は、「くであることよ」という詠嘆をあらわす。

二 分析

二・一 「見らくし良しも」と「見のさやけきか」

eの「見らくし惜しも」「見らくし良しも」

⑰：紐解かぬ 旅にしあれば あのみして 清き川原を 見ら

くし惜しも (見良久之惜蒙) [萬葉六・913]

⑱梅の花 散らすあらしの 音のみに 聞きし吾妹を 見らく

し良しも (見良久四吉裳) [萬葉八・1660]

を f 「名詞+格助詞ノ+形容詞連体形+終助詞カ」

㉑：渚には あぢ群騒き 島廻には 木末花咲き ここばくも

見のさやけきか (見乃佐夜気吉加) …

[萬葉十七・3991]

と較べてみる。⑰⑱は「見らく+シ」の形であったが、㉑は「見る」の連用形「み」出自の名詞形「見」が用いられてい

る。①⑦「見らくし惜しも」①⑧「見らくし良しも」を現代語訳すれば「見るのは惜しいことだ」「見ることは（お逢いできたことは）うれしいことだ」となり、②⑩の「見のさやけきか」は「目にさやかであるよ」となる。

また、詠嘆ではないが、「名詞＋格助詞ノ＋形容詞連用形」

○…わご大君の うちなびく 春の初めは 八千種に 花咲き
にほひ 山見れば 見のともしく 川見れば 見のさやけく
（見能等母之久：見乃佐夜気久） ものごとに 栄ゆる時と
見したまひ 明らめたまひ…

の「見のともしく」「見のさやけく」は「見て心ひかれ」「目にさやかで」となる。ク語法を用いる場合には、「〜であること」という一般性がうきぼりになり、連用形の名詞化したものの場合には、今見ている個性があらわになる。

二・二 「見れば悲しき」と「見るがさやけき」

○…山見れば 見のともしく 川見れば 見のさやけく（見能等母之久：見乃佐夜気久）…

の例をあげた。「山を見れば 見て心ひかれ 川を見れば 目にさやかで」というように、「見た」ことがきつかけで、ある感懐をいだく、という表現になっている。hの

③④古の 人にわれあれや 楽浪の 古き京を 見れば悲しき
〔見者悲寸〕

〔萬葉一・32〕

なども同じで、「見ると悲しい気持ちになる」「悲しい」のは作者である。それに対し、

○大滝を 過ぎて夏身に 近く居て 清き川瀬を 見るがさやけき（見何明沙）

〔萬葉九・1737〕

の場合は、「清い川瀬を見ることのすがすがしさよ」で、「見る」行為自体が気持ちのいいものである、と言っている。

※なお、へはじめに」において、

○防人に 行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしき
（美流我登毛之佐） 物思ひもせず

〔萬葉二十・4425〕

の新大系の訳は、

◎防人として行くのは誰の旦那さんですか、と尋ねる人
を見ると羨ましい。物思いもせずに。

となっており、「見るがともしき」は、「見ると羨ましい」
になっていて、主述関係が訳にあらわれてはいない、
と述べた。この訳の「見ると」は、右の

③④古の 人にわれあれや 楽浪の 古き京を 見れば悲しき
〔見者悲寸〕

〔萬葉一・32〕

「見れば悲しき」の訳の「見ると悲しい気持ちになる」の
「見ると」に該当する。

二・三 枕草子の「暑さ」・源氏物語の「うれしさ」「御かなしさ」

次に、f「ノ」

②松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともしさ(比等能等母斯佐) 〔萬葉五・863〕

ここには、「ともしさ」という「形容詞語幹+サ」が用いられている。

後の枕草子・源氏物語に、

○朝座の講師清範、高座の上も光り満ちたる心地して、いみじうぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しさしたる事の、今日過ぐまじきをうちおきて、ただすこし聞きて帰りなむとしつるに、しきなみにつどひたる車なれば、出づべき方もなし。

〔枕草子八一頁〜八二頁〕

○たゞかく何となくて過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおほゆれ。

〔源氏物語③若菜下 三五一頁〕

○宮はいといとお(ほ)しとおぼすなかにも、お(を)とこ君の御かなしさはすぐれ給にやあらん、かゝる心のありけるもうつくしうおぼさるゝに、：

〔源氏物語②少女 二九九頁〕

「暑さ」「うれしさ」「御かなしさ」などの名詞が存在する。萬葉集には、このような明確な形の形容詞出自の名詞が存在

しないため、「人のともしさ」の「ともしさ」は名詞として捉えられず、「形容詞語幹+サ」という特別な語法として考えられてきた。

初めにも掲げたが、日本国語大辞典へがの項・格助詞①に、

◇「形容詞+さ」の形に続き、感動を表わす。「さ」は体言を作る接尾語であるから、この用法は、形式的には①の連体格用法といえるが、意味的には「…が…であることよ」と下の形容詞に叙述性が認められるので、①の主格用法と同じである。①の用法から③の用法への過渡的用法と見られる。↓語誌③

(※なお、ここに言う①は「連体格用法」、③は「連用格用法」である。)

と云い、【語誌】(3)に、

◇③の用法を山田文法では「喚体句」と称する。¹⁰⁾

と云う。また、日本国語大辞典への項・格助詞③に、

◇体言を受け、形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものを修飾する。↓語誌⑦

と云い、【語誌】(7)に、

◇形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものは体言の資格を有するから、①③の用法は形態的には①④の用法と同じであるが、意味的には詠嘆表現ながら主述関係が認められ、④①の用法に近い。「山田文法」では喚体句と称する。¹²⁾

(※なお、

ここに言う①は「連体格を示す格助詞。体言または体言に準ずるものを受けて下の体言にかかる。」

①①は「下の実質名詞を種々の関係(所有・所属・同格・属性その他)において限定・修飾する。」

①①①は「修飾される実質名詞が表現されているもの。」

④は「主格を示す助詞。」

④①は「④従属句や条件句など、言い切りにならない句の主語を示す。」

④連体形で終わる詠嘆の文や疑問・反語・推量文中の主語を示す。」

「④言い切りの文の主語を示す。」

である。」

と言っている。日本国語大辞典では、この「ガ」は

◇形式的には連体格用法

「ノ」は

◇形態的には①①①の用法と同じ

(※①は「連体格」、①①は「下の実質名詞を種々の関係(所有・所属・同格・属性その他)において限定・修飾する。」、①①①は「修飾される実質名詞が表現されているもの。」)

と言うが、連体格であるということは、その体言(形容詞語幹+サ)が主語あるいは対象(名詞・名詞句)の属性である

ことに直結するものである。また、

◇意味的には、「…が…であることよ」と下の形容詞に叙述性が認められる

と言っているが、それはどこから出てきたものであるのか。たとえば現代語で、「月の明るさ」と言ったときに、それが「月が明るいこと」という意味になるであろうか。同じ日本国語大辞典へあかるさの項を見れば

◇あかるさ【明】『形』(形容詞「あかるい」の語幹に接尾語「さ」の付いた語)

明るいま。また、その度合。

と言っている。これが現代語の「形容詞語幹+サ」の解釈である。

三 考察

三・一 山田孝雄の喚体句

日本国語大辞典へがの項【語誌】には、山田孝雄の喚体句を掲げている。ここで、山田の喚体句について検討する。

『奈良朝文法史』(寶文館 昭和二十九年)には、

◇句には述體、喚體の二種を區別す。述體の例はあぐるまでもなければ、次に一つあぐ。

阿麻遲波等保斯

アマチハトホシ

(萬五) 八〇一

喚體の例は少しく多くあげむ。

久奴知許等其等美世摩斯母乃乎

クヌチコトゴトミセマシモノヲ

(萬五) 七九七

伊夜米豆良之岐烏梅能波奈加母

イヤメツラシキウメノハナカモ

(萬五) 八二八

彌牟必登母我聞

ミムヒトモガモ

(萬五) 八五〇

久多志須都良牟純綿良波母

クタシスツラムキヌワタラハモ

(萬五) 九〇〇

於保夫禰爾麻可治之自奴伎宇奈波良乎許藝旦天和多流月

人乎登社

オホフネニマカヂシジヌキウナバラコギデテワタルツキヒトラトコ

(萬、十五) 三六一一

伊波我禰乃安良伎之麻禰爾夜杼里須流君

イハガネノアラキシマネニヤドリスルキミ

(萬、十五) 三六八八

伊毛我已許呂乃須別毛須別那左

イモガココロノスベモスベナサ

(萬、五) 七九六

伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐

イモラミラムヒトノトモシサ

(萬、五) 八六三

許具布奈妣等乎見流我等母之佐

コグフナヒトラミルガトモシサ

(萬、十五) 三六五八

於毛比和夫良牟伊母我可奈思佐

オモヒワブラムイモガカナシサ

(萬、十五) 三七二七

伊麻左良爾安布倍伎與之能奈伎我佐夫之佐

イマサラニアフベキヨシノナキガサブシサ (萬、十五) 三七三四

能登湍河音之清左

ノトセノカハノオトノサヤケサ

(萬、三) 三二四

(※これは第二句・第四句であるので、「ノトセガハオトノサヤケサ」と訓むところである。)

大聖之言乃宜左

オホキヒジリノコトノヨロシサ

(萬、三) 三三九

不清照有月夜乃見者悲沙

オホホシクテレルクヨノミレバカナシサ

(萬、六) 九八二

霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左

ホトトギスナクナルコエノオトノハルケサ

(萬、十) 一九五二

須流須邊乃奈左

スルスベノナサ

(萬、十七) 三九二八

述體句の主要成分としては主語と述語とをあげべく、其の主語には體言又は體言に准ぜられたるものをたて、述語には用言を立つるは古今同一轍なり。

喚體は二様の成立あり。一は述體にていふ述語が體言を裝定せるが如き形のもの、一はその述語に相當せるものが、結體せるものなり。この終のものは形容詞の語幹を接辭「さ」にて結體せしめたるものの例をのみ見る。

〔五六七頁—五六九頁〕

◇形容詞の語幹は又接尾辭「さ」を附するによりて體言とすることあり。その例、

里近有常聞乍不見之爲便奈沙

サトチカクアリトキ、ツ、ミヌガスベナサ

(萬、四) 七五七

伊可爾加母世牟須流須邊乃奈佐

イカニカモセムスルスベノナサ

(萬、十七) 三九二八

伎美我許己呂能須敵母須敵奈佐

キミガココロノスベモスベナサ

(萬、十八) 四一〇六

能登湍河音之清左多藝通瀬每爾

ノトセガハオトノサヤケサタギツセゴトニ

(萬、三) 三一四

去來率去河之音之清左

イザイザカハオトノサヤケサ

(萬、七) 一一二

霧隱妻呼雄鹿之音之亮左

キリカクリツマヨブシカノコエノサヤケサ

(萬、十二) 二一四一

今夜卷跡念之吉沙

コヨヒマカムトオモヘルガヨサ

(萬、十) 二〇七三

伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐

イモラミラムヒトノトモシサ

(萬、五) 八六三

吉名張乃猪養山爾伏鹿之嬌呼音乎聞之登聞思佐

ヨナバリノキカヒノヤマニフスシカノツマヨブコエラキクガトモシサ

(萬、八) 一三六一

許具布奈妣等乎見流我等母之左

コグフナビトラミルガトモシサ

(萬、十五) 三六五八

伊麻左良爾安布倍伎與之能奈伎我佐夫之佐

イマサラニアフベキヨシノナキガサブシサ

(萬、十五) 三七三四

【一二三頁—一二四頁】

と言っている。ここで山田は、「形容詞語幹+さ」を体言と位置付けている。

さらに、この「形容詞語幹+サ」は、近い人々をうける場合には「ガ」、その他の人・ものごとの場合は「ノ」、名詞句をうける場合は「ガ」を取る。近い人々をうける場合には「ガ」、その他の人・ものごとの場合は「ノ」を取るの、当時の連体修飾の形にそつたものである。また、名詞句をうける場合は「ガ」を取ることも含めて、へ・一・一に述べたように、「ゴト(シ)」につづく場合と同じである。

「ゴト」はもと体言であつたものである。これらのことを併せ考えると、この「形容詞語幹+サ」は、枕草子の「暑さ」、源氏物語の「うれしさ」「御かなしさ」などと同じ「名詞」であると言つてよい。

次に、『奈良朝文法史』の、格助詞「ノ」「ガ」の項に、「體言に對して連體格となるもの」「體言が他に對して連體格となるもの」について述べ、

◇「の」は下なる語に意義の主點を歸着せしむる如き關係にての修飾をなせること…

「が」は意義上、上なる語を主點として下なる語をそが所屬なりといふやうに聞えさするものなり。

【四〇九頁】

と言う。そして、

◇この意義上の主点の存在につきての差異は、又これが所謂文の主点を示すに轉用せらるゝと稱せらるゝものにてても見ゆるなり。今之を示さむ。

「の」の例、

我大王乃朝廷取撫賜夕庭伊縁立之御執乃

ワガオホキミノアシタニハトリナデタマヒユフベニハイヨリタタシミ

トラシノ

(萬、一) 三

：(例)：

以上の如く多く附屬句たるものの主語を示すに用ゐらるゝなり。その獨立文の主語を示せるは稀に存するを見るのみ。而、それらは述語が多くは複語尾を有したるものにして主語との結合を緊密にすべき要あるものなりとす。その例、

情無雲乃隱障倍之也

ココロナククモノカクサフベシヤ

(萬、一) 一七

：(例)：

又喚體句にありては勿論主體をこの「の」にて示すものとす。

伊毛我己許呂乃須別毛須別那左

イモガココロノスベモスベナサ

(萬、五) 七九六

伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐

イモラミラムヒトノトモシサ

(萬、五) 八六三

これらを通覧するに、みなその主語と述語との間の關係を緊密にする爲のものと見ゆるなり。而、その附屬句のものもこゝのと共に「の」がその意義上の性質として下なるものに

重きをおけることは認めらるるなり。

[四一〇頁—四一三頁]

◇次に「が」はいかにといふに、

和何多々勢禮婆

ワガタタセレバ

(記上)

：(例)：

これら皆附屬句の主語を示すことは明なるが、附屬句ならぬ文の主語を示すものとしては、

加奈思吉兒呂我爾努保佐流可母

カナシキコログアニヌホサルカモ

(萬、十四) 三三五

：(例)：

等の例にて、これ亦その述語が單純なる用言にはあらで、複語尾を有せるもの等その結合を緊密にすべき必要あるものに限れるを見るべし。

今この二様の場合に於ける「の」「が」の意義上の區域はさきにいひし上を主とすると下を主とするとの差異によりて區別せられべきことは、その心して上の諸例をよみ試みば、思半にすぎむ。

[四一三頁—四一四頁]

と言つてゐる。

ここに、

◇喚體句にありては勿論主體をこの「の」にて示すものとす。として、

◇伊毛良遠美良牟比等能母斯佐

イモラヲミラムヒトノトモシサ

(萬、五) 八六三

などの例をあげ、

◇これらを通覧するに、みなその主語と述語との間の関係を緊密にする爲のものと思ゆるなり。

としている。「主体」「主語」「述語」ということばを使っていることから、山田は、この喚体句を主述関係ととらえていることになる。

山田があげた右の例は、拙稿において②③にあげた

②松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともし

さ (比等能母斯佐)

[萬葉五・863]

である。これについては後にのべることとして、まず、同じくへf ノにあげた

④大きな海の 水底とよみ 立つ波の 寄せむと思へる 磯のさ

やけさ (將依思有 磯之清左)

[萬葉七・1201]

を考える。これは、

◎大海の水底までも揺るがして立つ波が、寄せようとしている磯のさやけさよ。

と訳すことができる。この場合には、「ノ」の上下は主語と述語の関係になっているように見える。また、

○高松の この峰も狭に 笠立てて 満ち盛りたる 秋の香の良さ (秋香乃吉者)

[萬葉十・2233]

は、「秋香乃吉者」が一音一字ではないのであるが、句末の「者」は「名詞化する字」であり、「乃」字が入っていることで、「吉者」を「よさ」と訓み、全体で「あきのかのよさ」と訓むと考えられる。この場合、「良さ」は「秋の香」の属性をあらわす感が強い。ただし、「良い」と思うのは、作者ではある。それでは③はどうか。新大系・全集・集成の訳は、

新大系 ◎松浦川の玉島の浦に若鮎を釣っている娘らを見ているであろう人の羨ましさよ。

全集 ◎松浦川の 玉島の浦で 若鮎を釣る 娘たちを見ているような 人の羨ましさよ

集成 ◎松浦川の玉島の浦で若鮎を釣る、美しい娘子たちを見ている人々が羨ましくてたまらない。

となっている。いずれも歌の作者の気持ち(羨ましい)を述べるものとなっていて、「ノ」の上下は主述関係ではない。④と同じ形であるのであるから、これも主述関係と考えれば、「ともし」の意味は、「見ている人がうらやましい気持ちになるほどの状態である」ということになるであろう。次に、「ガ」を用いた

③〆薦 牟良自が磯の 離磯の 母を離れて 行くが悲しさ (波々乎波奈例旦 由久我加奈之佐)

[萬葉二十・4338]

を考える。これは、

新大系 ◎ (〆薦) 牟良自が磯の 離磯のように、母から離れ

て行くことの悲しさよ。

全集

◎ (晝薦) 牟良自が磯の 離れ磯の 母と離れて 行く 悲しさよ

集成

◎ 牟良自が磯、その岸から離れた沖の磯のように、母さんのもとを離れて、ひとり旅立つことが悲しくて ならない。

と訳されている。集成の訳の「ガ」の上下は主語と述語ではない。「私は母を離れて行くのを悲しいと思う」と解することのできる内容で、「母を離れて行く」は「悲し」の対象になっている。全集の訳も、自分が悲しいのであろう。この場合も、上下を主述と考えるならば、「母と離れて行く」ということが「悲しい状態である」ということになる。新大系の訳は、このどちらの意にも解せる訳である。

◎ 塵泥の 数にもあらぬ われゆゑに 思ひわぶらむ 妹がかなしさ (伊母我可奈思佐) [萬葉十五・3727]

の場合にも、

新大系

◎ (塵泥の) ものの数にも入らない私ゆえに、思いわびているだろうあなたのいとしさよ。

全集

◎ 数にも入らない わたしゆえに 落胆しているであらう あなたのいとしさよ

集成

◎ 塵や泥のように物の数でもない私ゆえに、今頃さぞしよげかえっていることだろうと思うと、そんなあの女が愛しくてならない。

で、「かなし」は作者の思いを述べ、「妹」はその思いの対象である。「ガ」の上下を主述と考えるならば、この場合にも、「思ひわぶらむ妹」が「いとおいしい状態である」ということになる。

「ノ」「ガ」の上下を主述関係ととらえるということは、以上のようなことである。

三・二 主語と対象

山田の喚体句について、考えてきた。日本国語大辞典では、山田の喚体句に触れながらも、へがの項・格助詞①に、

◇「形容詞十さ」の形に続き、感動を表わす。「さ」は体言を作る接尾語であるから、この用法は、形式的には①の連体格用法といえるが、意味的には「…が…であることよ」と下の形容詞に叙述性が認められるので、③④の主格用法と同じである。①の用法から③の用法への過渡的用法と見られる。⁽¹⁵⁾
(※なお、ここに言う①は「連体格用法」、③は「連用格用法」である。)

と言い、また、へがの項・格助詞③に、

◇体言を受け、形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものを修飾する。↓語誌⁽¹⁶⁾(7)

【語誌】(7)に、

◇形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものは体言の資格を有するから、①③の用法は形態的には①④の用法と同じであるが、意味的には詠嘆表現ながら主述関係が認められ、④①の用法に近い。「山田文法」では喚体句と称する。¹⁷⁾

(※なお、

ここに言う①は「連体格を示す格助詞。体言または体言に準ずるものを受けて下の体言にかかる。」

①①は「下の実質名詞を種々の関係(所有・所属・同格・属性その他)において限定・修飾する。」

①④④は「修飾される実質名詞が表現されているもの。」

④は「主格を示す助詞。」

④①は「④従属句や条件句など、言い切りにならない句の主語を示す。」

④連体形で終わる詠嘆の文や疑問・反語・推量文中の主語を示す。」

「④言い切りの文の主語を示す。」

である。

と言っていて、歯切れの悪い説明になっている。右に見たように、「下の形容詞に叙述性が認められる」ので「主格用法と同じ」となるとは限らない。新大系・全集・集成などの訳を見ると、下の形容詞は、上の名詞・名詞句の述語ではなく、作者の思いを述べている訳になっているものが多かった。

それでは、はじめにあげた②④の歌

②④ 大きな海の 水底とよみ 立つ波の 寄せむと思へる 磯のさ
やけさ (将依思有 磯之清左) [萬葉七・12201]

の場合はどうかであろうか。筆者は、この歌について、

◎大海の水底までも揺るがして立つ波が、寄せようとして
いる磯のさやけさよ。

と訳すことができる。この場合には、「ノ」の上下は主語と述語の関係になっているように見える。

と述べた。「磯のさやけさ」は主述関係と解してよいのであろうか。

形容詞は、客観的に、それが形容するモノゴトの性質・状態をあらわしもある一方、それを見ている人の主観「〜と思う」をもあらわし、その間で強い弱い度合いの移行をなすものである。人の情意をあらわす形容詞の場合には、より主観性が強くなる。客観性が強い場合、1201歌のように、「さやけし」は「磯」の状態を述べているとらえて、「ノ」の上下が主述関係であるように見える。一方、「さやけし」と思うのは作者の主観であり、その場合、「磯」は「さやけし」の対象である、ということになる。②③の歌

②③ 松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともし
さ (比等能等母斯佐) [萬葉五・863]

の場合、「ともし」を「うらやましい」という、主観にかたむいた意味でとらえるとき、「妹らを見らむ人」は、「ともし」の対象となるのである。△・二 種々相において、筆者はすでに、「対象」ということばを使ってきた。「ノ」「ガ」の上の語(句)は、主語でもあり対象でもあり得るが、このようにして、主語であるより対象であるにとらえられる場合が多いのである。

三・三 「音の清けく」と「磯のさやけさ」

ここで、

②⑩ 泊瀬川 流るるみをの 瀬を速み めで越す波の 音の清けく
く(音之清久) [萬葉七・1108]

②⑪ 大きな海の 水底とよみ 立つ波の 寄せむと思へる 磯のさやけさ
(将依思有 磯之清左) [萬葉七・1201]

このふたつの歌について、新大系・全集・集成の訳を見る。
新大系の訳では、

②⑩ 泊瀬川の流れる水脈の瀬が速いので、井堰を越える波の音の清いことよ。

②⑪ 大海の底まで鳴り揺るがして立つ波が、寄せようと思つてい
る磯のすがすがしさよ。

全集の訳では、

②⑩ 泊瀬川の 流れる水の 瀬が速いので 堰を越す波の 音の清さよ

②⑪ 大海の 底まで揺るがして 立つ波が 寄せようと思つてい
る 磯のすがすがしさよ
集成の訳では、

②⑩ 初瀬川の渦巻き流れる川瀬が早いので、井堰を越えてほとば
しる波、その波の音が清らかに聞えてくる。

②⑪ 大海原の底までとどろかして立つ波のうち寄せようとしてい
る磯は、何と清々しいことか。

となっている。歌末の訳は、新大系では「清いことよ」「すがすがしさよ」となっており、ク語法と「形容詞語幹+サ」の違いを考えた訳、全集ではいずれも「清さよ」「すがすがしさよ」で原文の「清けく」「さやけさ」の違いのわからない訳、集成では「清らかに聞えてくる」「何と清々しいことか」で意識、になっている。新大系の②⑪訳の「すがすがしさよ」は、現代語の「すがすがしさ」をそのままではめている点、初めに挙げた巻二十・4425歌

○防人に行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしき 物思
ひもせず

の脚注に、

◇「見るがともしき」は、動詞の連体形を「が」で受けて、形容詞の名詞形で結ぶ感動表現の一類型。見ることの羨ましさよ、の意。

「形容詞語幹+サ」を「形容詞の名詞形」と言っていること、と符合する。名詞形であるとは、△・二・三に述べた枕草子

の「暑さ」・源氏物語の「うれしき」「御かなしき」などと同じであるということであり、現代語で「月の明るさ」の「明るさ」を「明るいまま。また、その度合。」と説明するのと同じものである。これは「くのくさよ」と訳すほかない。よって、^{②④}「磯のさやけさ（形容詞語幹＋サ）」を明確に現代語訳するには、この新大系の訳にあるように、「磯のすがすがしさよ」とすることとなる。

＜二・一＞に「見らくし良しも」と「見のさやけきか」とを比較して、

※ク語法を用いる場合には、「くであること」という一般性がうきほりになり、連用形の名詞化したものの場合には、今見ている個性があらわになる。

と述べたが、同じように、ク語法を用いた^{②⑤}「音の清けく」が一般的であるのに対して^{②③}「人のともしき」は個別的となる。換言すれば、ク語法を用いたものが客観的であるのに対して「くのくさ」は主観的、ク語法を用いたものが冷静であるのに対して「くのくさ」は情感的と言うことができる。

次に、「名詞（名詞句）＋ノ・ガ＋形容詞語幹＋サ」の用例をあげ、その訳を具体的に考える。

^{②②} 今のごと 恋しく君が 思ほえば いかにかもせむ するす

べのなさ（須流須辺乃奈左） [萬葉十七・3928]

◎今のように恋しくあなたが思われたら、一体どうしたらよいのか。なすすべのなさよ。

^{②③} 松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともし
さ（比等能等母斯佐） [萬葉五・863]

◎松浦川の玉島の浦に若鮎を釣っているあの子を見ているだらう人の、うらやましきよ。

^{②⑥} 塵泥の 数にもあらぬ われゆゑに 思ひわぶらむ 妹が
なさ（伊母我可奈思佐） [萬葉十五・3727]

◎塵泥のような、ものの数にも入らぬ私のせいで、思いわびているであらうあなたの、いとおしさよ。

^{②⑨} 遠き山 関も越え来ぬ 今更に 逢ふべきよしの なきがさ
ぶしさ（奈伎我佐夫之佐） [萬十五・3734]

◎遠い山や関も越えて来た。今はもうあなたに逢うことのできる手だてがないことの、寂しさよ。

^{③⑩} 防人に行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしき（美流
我登毛之佐） 物思ひもせず [萬葉二十・4425]

◎防人に行くのはどこのご主人、と聞く人を見ることのうらやましきよ。何の物思いもしないで。

ここに、

^{②②} 「なすすべのなさよ」

^{②③} 「あの子を見ているだらう人の、うらやましきよ」

②6 「わたしのせいで思いわびているであろうあなたの、いとおしきさよ」

②9 「今はもうあなたに逢うことのできる手だてがないことの、寂しさよ」

③0 「〜と問う人を見ることの、うらやましきさよ」

と訳した。まとめれば、「〜の〜さよ」である。また、右に、

②0 泊瀬川 流るるみのをの 瀬を速み ゐで越す波の 音の清けく

の「音の清けく」はク語法「〜であることよ」として、

②4 大きな海の水底とよみ 立つ波の 寄せむと思へる 磯のさやけさ (将依思有 磯之清左) [萬葉七・1201]

と対比した。歌末表現でも、

E 歌末が連体形で、「〜であることよ」の意になるもの

(5) 天地と 相栄えむと 大宮を 仕へ奉れば 貴く嬉しき (都可倍麻都礼婆 貴久宇礼之伎) [萬葉十九・4273]

F 形容詞ク語法でおさめ、「〜であることよ」の意になるもの
(6) 泊瀬川 流るるみのをの 瀬を速み ゐで越す波の 音の清けく (音之清久) [萬葉七・1108]

のように、歌末が連体形であるもの・形容詞ク語法でおさめるものを、「〜であることよ」の意になるものとした。

日本国語大辞典に言う

◇意味的には「…が…であることよ」と下の形容詞に叙述性が

認められる

ものとは、かようなものについて言えることなのである。つまり、日本国語大辞典の「…が…であることよ」の訳は、「ゐで越す波の 音の清けく」のようなものにあてはまるのであって、「磯のさやけさ」(②4)や「吉野川 音のさやけさ」(④0)のような場合にはあてはまらない、ということである。

②2の「今のごと 恋しく君が 思ほえば いかにかもせむ するすべのなさ」は「なすすべのない」ことへの絶望感を言うものであるが、まずは「なすすべがない」という事実をしつかりと把握するものである。

③0 「防人に行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしき 物思ひもせず」は、「防人に行くのはどこのご主人、と聞く人を見ることとがうらやましい。」という歌の主のやるせなさを言うのみならず、その場に、夫を防人に送らねばならない妻や家族がいることに、思いを致すことのない「問ふ人」の、うらやましいばかりの気楽さ、を見ることのみじめな状態を言うもの、である。それは、第五句の「物思ひもせず」という「問ふ人」への限定句に明確にあらわれている。

②3の「松浦川 玉島の浦に 若鮎釣る 妹らを見らむ 人のともしき」の、「あの子を見ているだろう人のうらやましきさ。」は自分の羨望を言うと同時に、「あの子を見ている人」の幸運さ、

を言うものであり、

②⑥の「塵泥の 数にもあらぬ われゆゑに 思ひわぶらむ 妹がかなしさ」の、「わたしのせいで思ひわびているであろうあなたが、いとおいしいことだよ」は歌の主の感懐にすぎないが、「あなたのいとおいしさよ」は、歌の主の感懐もさることながら、「あなた」のいとおいしい状態、を前面にうちだすものである。

②⑨の「遠き山 関も越え来ぬ 今更に 逢ふべきよしの なきがさぶしさ」の、「今はもうあなたに逢うことのできる手だてがないことの、寂しさよ」は、歌の主の寂しい気持ちを言うものでもありながら、「手だてのないこと」の空虚さを言うものでもある。

ここに「事実をしつかりと把握」「みじめな状態」「幸運さ」「いとおしい状態」「空虚さ」ということばを使つたが、その語感そのものが「形容詞語幹＋サ」の意味である。詠嘆は文脈上、歌の中にこめられ、現代語訳の「よ」という詠嘆の助詞にあらわれるものである。へ・二・Aに掲げた終止形で終始するもの、E歌末が連体形で「〜であることよ」の意になるもの、F形容詞ク語法でおさめ「〜であることよ」の意になるもの、G形容詞連用形で終止するもの

A 終止形で終止するもの

(1)ますらをの さつ矢たばさみ 立ち向かひ 射る形的形は 見
るにさやけし(射流円方波 見尔清潔之) [萬葉一・61]

E 歌末が連体形で、「〜であることよ」の意になるもの

(5)天地と 相栄えむと 大宮を 仕へ奉れば 貴く嬉しき(都
可倍麻都礼婆 貴久字礼之伎) [萬葉十九・4273]

F 形容詞ク語法でおさめ、「〜であることよ」の意になるもの

(6)泊瀬川 流るるみをの 瀬を速み ゐで越す波の 音の清け
く(音之清久) [萬葉七・1108]

G 形容詞連用形

(7)見まく欲り 来しくも著く 吉野川 音のさやけさ 見るに
ともしく(音清左 見二友敷) [萬葉九・1724]

H 「形容詞語幹＋サ」の場合も同じである。
などにも、詠嘆が込められていることを、はじめに述べた。

こうして、へ・一・一にあげた詠嘆表現の、

○天地と 相栄えむと 大宮を 仕へ奉れば 貴く嬉しき(都
可倍麻都礼婆 貴久字礼之伎) [萬葉十九・4273]

は、「仕え奉ると貴くうれしい気持ちになることよ」

○…もののふの 八十伴の男の…ゑらゑらに 仕へ奉るを 見
るが貴さ(仕奉乎 見之貴者) [萬葉十九・4266]

は、「八十伴の男が笑い声をあげながらお仕えするのを見ることの
貴さよ」

○秋の花 種々にあれど 色ごとに 見し明らむる 今日_レの貴
さ(見之明良牟流 今日之貴左) [萬葉十九・4255]

は、「わが大君が秋の花をその色ごとに御覧になって心をお暗らし

になる今日の日の貴さよ」のように訳しわけることができる。

結び

以上述べてきたことより、「形容詞語幹＋サ」は特別な語法ではなく、「名詞」であり、「く＋ノ・ガ＋名詞（形容詞語幹＋サ）」の詠嘆は、「くはくであることよ」と訳すのではなく、「くはく……さよ」と訳すものであることを確認する。それは、自身の感情を吐露するものでもあると同時に、「ノ」「ガ」がうける名詞・名詞句「く」の属性でもある。自身の感情を吐露する場合「ノ」「ガ」の上は対象となり、属性の場合「ノ」「ガ」の上は主語となる。

それは、自身の感情を吐露するものでもあるため、

(6) 泊瀬川 流るるみさをの 瀬を速み るで越す波の 音の清け

く（音之清久）

〔萬葉七・1108〕

のようにク語法で詠嘆をあらわすものが、「くであることよ」と訳すことができ、冷静であるのに対し、情感的ということができる。

これが、「形容詞語幹＋サ」の詠嘆の意味である。

注

(1) 『奈良朝文法史』（山田孝雄著 寶文館 昭和二十九年）に、

◇「の」「が」の用法の差異は、以上に止まらずして、そ

の上に來るべき語が、體言なるか用言なるかによりてあらはるゝことあり。即喚体句にありて、

霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左

ホトトギスナクナルコエノオトノハルケサ

（萬、十）一九五二

波波乎波奈例豆由久我加奈之佐

ハハヲハナレテユクガカナシサ

（萬、二十）四三三八

刀布非登乎美流我登毛之佐

トフヒトラミルガトモシサ

（萬、二十）四四二五

の如く主體が體言にてあらはるゝ時は「の」にて示し、用言にてあらはるゝ時は「が」にて示す。この傾向は形式用言の客語にもあらはるゝなり。

比加利乃期止岐

ヒカリノゴトキ

（仏足石歌）

灌知布何其等久

ソングチフガゴトク

（萬、五）八九七

見要奴我其登久

ミエヌガゴトク

（萬、十九）四一六〇

又用言を以て副詞の客語とする際にも「の」「が」の別を見るをうべし。

於保夫禰能由伎能麻爾麻爾

オホフネノユキノマニマニ

（萬、十五）三六四四

比伎能麻爾麻爾

ヒキノマニマニ

（萬、十九）四二二〇

の如く、連用形を以て體言に准ぜらるゝ形に於いては必「の」を伴ふものなり。後世のかくの如き場合には多くは連體形にて「が」助詞にて示せど、この期のものには

この形を見ず。次には又、

多知能已蘇伎爾

タチノイソギニ

(萬、二十) 四三三七

佐吉乃盛波

サキノサカリハ

(萬、十七) 三九〇四

能彌弓能能知波(ママ。 *「知」に印がついているが、上の方の「能」であろう)

ノミテノチハ

(萬、五) 八二二

の如く用言の連用形を以て體言に准ずるものが裝定語となれる場合のものあり。かくて又豫想の複語尾「む」の原形終止よりして

絶牟乃心我不思

タエムノココロワレハオモハズ

(萬、十二) 三〇七一

(※この歌は、現在では、「タエムノココロワガオモハナクニ」と訓んでいる。)

多延武能已許呂和我母波奈久爾

タエムノココロワガオモハナクニ

(萬、十四) 三五〇七

といふが如き形あり。これらみな「が」になき所にして、したがつて意義上の差異もこれによりていよく著しく見ゆるなり。即「の」は單に連ぬるのみなるに、「が」は上のを體言化せることを特示するものなり。

〔四一五頁—四一六頁〕

と言う。

『奈良朝文法史』に言うように、

○大君の 命かしこみ 大船の 行きのまにまに (由伎能麻尔末尔) 宿りするかも

〔萬葉十五・3644〕

のような、連用形出自の名詞の場合には「ノ」を用いている。ただし、

○磯の浦に 常よ引き住む 駕鸛の 惜しきあが身は 君がまにまに (伎美我末仁麻尔)

〔萬葉二十・4505〕

「君」の場合は、「形容詞語幹+サ」の場合と同じく「ガ」である。

そして、「上」「下」の場合には、

○冬木の上に (冬木乃上尔)

〔萬葉八・1645〕

○わが上には (和我倍尔波)

〔萬葉十四・3421〕

○八重折るが上に (夜敵乎流我宇倍尔)

〔萬葉二十・4360〕

がある一方、

○尾花が上に (尾花我上尔)

〔萬葉八・1564〕

○尾花が下の (乎花我下之)

〔萬葉十・2270〕

○木末が下に (樹奴礼我之多尔)

〔萬葉十三・3221〕

(2) のような用例もある。身近な草木には「ガ」を用いたものか。

『奈良朝文法史』

◇句には述體、喚體の二種を區別す。述體の例はあぐるまでもなければ、次に一つあぐ。

阿麻遲波等保斯

アマチハトホシ

(萬五) 八〇一

喚體の例は少しく多くあげむ。

久奴知許等其等美世摩斯母乃乎

クヌチコトゴトミセシモノヲ

(萬五) 七九七

伊夜米豆良之岐鳥梅能波奈加母

イヤメツラシキウメノハナカモ

(萬五) 八二八

彌牟必登母我聞

ミムヒトモガモ

(萬五) 八五〇

久多志須都良牟純綿良波母

クタシスツラムキヌワタラハモ

(萬五) 九〇〇

於保夫禰爾麻可治之自奴伎宇奈波良乎許藝弓天和多

流月人乎登祐

オホフネニマカヂシジヌキウナバラコギアデワタルツキヒト

ヲトコ

(萬、十五) 三六一一

伊波我禰乃安良伎之麻禰爾夜杵里須流君

イハガネノアラキシマネニヤドリスルスキミ

(萬、十五) 三六八八

伊毛我已許呂乃須別毛須別那左

イモガココロノスベモスベナサ

(萬、五) 七九六

伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐

イモラミラムヒトノトモシサ

(萬、五) 八六三

許具布奈妣等乎見流我等母之佐

コグフナヒトラミルガトモシサ

(萬、十五) 三六五八

於毛比和夫良牟伊母我可奈思佐

オモヒワブラムイモガカナシサ

(萬、十五) 三七二七

伊麻左良爾安布倍伎與之能奈伎我佐夫之佐

イマサラニアフベキヨシノナキガサブシサ

(萬、十五) 三七三四

能登端河音之清左

ノトセノカハノオトノサヤケサ

(萬、三) 三二四

(※これは第三句・第四句であるので、ノトセガハオトノサヤケサ」と訓むところである。)

大聖之言乃宜左

オホキヒジリノコトノヨロシサ

(萬、三) 三三九

不清照有月夜乃見者悲沙

オホホシクテレルツクヨノミレバカナシサ

(萬、六) 九八二

霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左

ホトトギスナクナルコエノオトノハルケサ

(萬、十) 一九五二

須流須邊乃奈左

スルスベノナサ

(萬、十七) 三九二八

述體句の主要成分としては主語と述語とをあぐべく、其の主語には體言又は體言に准ぜられたるものをたて、述語には用言を立つるは古今同一轍なり。

喚體は二様の成立あり。一は述體にていふ述語が體言を裝定せるが如き形のもの、一はその述語に相當せるものが、結體せるものなり。この終のものは形容詞の語幹を接辭「さ」にて結體せしめたるものの例をのみ見る。

〔五六七頁—五六九頁〕

◇形容詞の語幹は又接尾辭「さ」を附するによりて體言とすることあり。その例、

里近有常聞乍不見之爲便奈沙

サトチカクアリトキ、ツ、ミヌガスベナサ

(萬、四) 七五七

伊可爾加母世牟須流須邊乃奈佐

イカニカモセムスルスベノナサ

(萬、十七) 三九二八

伎美我許己呂能須敵母須敵奈佐

キミガココロノスベモスベナサ

(萬、十八) 四一〇六

能登端河音之清左多藝通瀬每爾
ノトセガハオトノサヤケサタギツセゴトニ

(萬、三) 三一四

去來率去河之音之清左

イザイザカハノオトノサヤケサ

(萬、七) 一一二

霧隱妻呼雄鹿之音之亮左

キリカクリツマヨブシカノコエノサヤケサ

(萬、七) 二一四一

今夜卷跡念之吉沙

コヨヒマカムトオモヘルガヨサ

(萬、七) 二〇七三

伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐

イモラヨミラムヒトノトモシサ

(萬、五) 八六三

吉名張乃猪養山爾伏鹿之婦呼音乎聞之登聞思佐

ヨナバリノキカヒノヤマニフスシカノツマヨブコエラキクガト

モシサ (萬、八) 一三六一

許具布奈妣等乎見流我等母之左

コグフナビトヲミルガトモシサ

(萬、十五) 三六五八

伊麻左良爾安布倍伎與之能奈伎我佐夫之佐

イマサラニアフベキヨシノナキガサブシサ

(萬、十五) 三七三四

(3)

日本国語大辞典第二版へがの項①【格助】②
◇「形容詞+さ」の形に続き、感動を表わす。「さ」は体

言を作る接尾語であるから、この用法は、形式的には①の連体格用法といえるが、意味的には「…が…であることよ」と下の形容詞に叙述性が認められるので、③①の主格用法と同じである。①の用法から③の用法への過渡

的用法と見られる。↓語誌(3)

(※なお、

ここに言う①は「連体格用法。受ける体言が、下の体言に対して修飾限定の關係に立つことを示す。現代語では「の」が用いられる。」

③は「連用格用法。受ける体言が、下の用言に対して修飾限定の關係に立つことを示す。」である。

(4)

日本国語大辞典第二版へがの項①【格助】【語誌】(3)
◇③の用法を山田文法では「喚体句」と称する。

(5)

日本国語大辞典第二版へがの項①【格助】③
◇体言を受け、形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものを修飾する。↓語誌(7)

(6)

日本国語大辞典第二版へがの項①【格助】【語誌】(7)
◇形容詞語幹に体言的接尾語「さ」の付いたものは体言の資格を有するから、①③の用法は形態的には①④の用法と同じであるが、意味的には詠嘆表現ながら主述關係が認められ、④①の用法に近い。「山田文法」では喚体句と称する。

(※なお、

ここに言う①は「連体格を示す格助詞。体言または体言に準ずるものを受けて下の体言にかかる。」

①①は「下の実質名詞を種々の關係(所有・所属・同格・属性その他)において限定・修飾する。」

①④①は「修飾される実質名詞が表現されているもの。」

④は「主格を示す助詞。」

④①は「④従属句や条件句など、言い切りにならない句

の主語を示す。」

「㊦連体形で終わる詠嘆の文や疑問・反語・推量文中の主語を示す。」

「㊧言い切りの文の主語を示す。」

である。)

(7) 全集頭注

◇このトモシは跡を追って行きたいの意。

トモシや欲シはラ格を受けることがある。

(8) 全集頭注

◇トモシは、「ところづら求め行きければ」(一八〇九)などの、跡をつけて行く意の下二段動詞トムから派生した形容詞で、跡をつけたい、が原義。やがてこの歌のそれのように、心引かれる、懐かしい、の意となり、更に転じて、羨ましい、少ないなどの意にも用いられることになる。

注(3)に同じ。
注(4)に同じ。
注(5)に同じ。
注(6)に同じ。
注(2)に同じ。

(9) 注(3)に同じ。
(10) 注(4)に同じ。
(11) 注(5)に同じ。
(12) 注(6)に同じ。
(13) 注(2)に同じ。
(14) 『奈良朝文法史』格助詞「ノ」「ガ」の項

「體言に對して連體格となるもの」「體言が他に對して連體格となるもの」について述べ、

◇「の」は下なる語に意義の主點を歸着せしむる如き關係にての修飾をなせること…

「が」は意義上、上なる語を主點として下なる語をそが所屬なりといふやうに聞えさするものなり。

と言う。そして、

◇この意義上の主點の存在につきての差異は、又これが所謂文の主點を示すに轉用せらるゝと稱せらるゝものにも見ゆるなり。今之を示さむ。

「の」の例、

我大王乃朝廷取無賜夕庭伊縁立之御執乃

ワガオホキミノアシタニハトリナデタマヒユフベニハイヨリタ
タシミトラシノ
(萬、一) 三

…(例)…

以上の如く多く附屬句たるものの主語を示すに用ゐらるゝなり。その獨立文の主語を示せるは稀に存するを見るのみ。而、それらは述語が多くは複語尾を有したるものにして主語との結合を緊密にすべき要あるものなりとす。その例、

情無雲乃隱障倍之也

ココロナククモノカクサフベシヤ
(萬、一) 一七

…(例)…

又喚體句にありては勿論主體をこの「の」にて示すものとす。

伊毛我已許呂乃須別毛須別那左

イモガココロノスベモスベナサ
(萬、五) 七九六

伊毛良遠美良牟比等能等母斯佐

イモラミミムヒトノトモシサ
(萬、五) 八六三

これらを通覧するに、みなその主語と述語との間の關係を緊密にする爲のものと見ゆるなり。而、その附屬句のものもこのも共に「の」がその意義上の性質として下

〔四〇九頁〕

なるものに重きをおけることは認めらるるなり。

〔四一〇頁—四一三頁〕

◇次に「が」はいかにといふに、

和何多々勢禮婆

ワガタタセレバ

(記上)

∴ (例) ∴

これら皆附屬句の主語を示すことは明なるが、附屬句ならぬ文の主語を示すものとしては、

加奈思吉兒呂我爾努保佐流可母

カナシキコロガニヌホサルカモ

(萬、十四 三三五—

∴ (例) ∴

等の例にて、これ亦その述語が單純なる用言にはあらで、複語尾を有せるもの等その結合を緊密にすべき必要あるものに限れるを見るべし。

今この二樣の場合に於ける「の」「が」の意義上の區域はさきにいひし上を主とすると下を主とするとの差異によりて區別せられうべきことは、その心して上の諸例をよみ試みば、思半にすぎむ。

〔四一三頁—四一四頁〕

と言っている。

(15) 注(3)に同じ。

(16) 注(5)に同じ。

(17) 注(6)に同じ。